

ISSN 2187-6177

日本語音声コミュニケーション 4

Japanese Speech Communication 4

2016. 3

日本語音声コミュニケーション教育研究会

Japanese Speech Communication

製作 ひつじ書房

目次

発刊のことば

日本語

論文

日本人高校生の中国語声調の知覚

—知識との関係に着目して—

王睿来・青山恭子・山本弥生・林良子1

論文

日本語の相づちの頻度とタイミングに関する総合的考察

羅希23

著者紹介

雑誌の案内（投稿の方法、連絡先）

編集後記

発刊のことは

日本語の音声コミュニケーションとその教育を専門に考える研究会「日本語音声コミュニケーション教育研究会」を、私たちが日本語教育学会のテーマ研究会として作ったのが2006年の4月です。ようやく7年目にして、会誌の発刊という悲願を達成できました。ご協力を賜りました方々に心よりお礼申し上げたいと思います。ありがとうございます。

『日本語音声コミュニケーション』（英語名 *Japanese Speech Communication*）は、マルチメディアを駆使したオンラインジャーナルです。紙媒体の雑誌や本と違って、動画そのもの、音声そのものを掲載することができ、掲載されたものは世界じゅうで視聴されます。文字では書き表せないような、ちょっとした「日本的」な仕草でも、日本語を発音している被験者の口の中を撮ったMRI動画でも、日本語の教室の様子でも、世界に向けて発表することができます。

日本語の音声コミュニケーションとその教育に関する私たちの理解をさらに深め、研究を活性化していくために、本誌をご活用下さいましたら幸甚です。

2013年 3月吉日

「日本語音声コミュニケーション教育研究会」代表幹事
定延利之

著者紹介

王睿来（おうえいらい）

神戸大学大学院国際文化学研究科博士後期課程学生

主たる研究テーマ：日本語教育、中国語教育、音声学

Ruilai WANG

Ph.D. student at Graduate School of Intercultural Studies, Kobe University, Japan. Main topics of research: Japanese as second language, Chinese as second language, Speech Communication.

青山恭子（あおやまきょうこ）

福井県立足羽高等学校教諭

主たる研究テーマ：中国語教育

Kyouko AOYAMA

Teacher, Asuwa Senior High School, Japan. Main topics of research: Chinese as second language.

山本弥生（やまもとやよい）

福井県立足羽高等学校教諭

主たる研究テーマ：中国語教育

Yayoi YAMAMOTO

Teacher, Asuwa Senior High School, Japan.

Main topics of research: Chinese as second language.

林良子（はやしりょうこ）

神戸大学大学院国際文化学研究科教授

主たる研究テーマ：音声学、外国語教授法、日本語教育

Ryoko HAYASHI

Professor, Graduate School of Intercultural Studies, Kobe University, Japan.

Main topics of research: Phonetics, Second language acquisition, Japanese as second language.

羅希（らき）

神戸大学大学院国際文化学研究科院生

主な研究テーマ：言語コミュニケーション、日本語教育

主要業績：「日本語の格助詞『に』に関する中国語話者の誤用分析」『日本近代学研究』36:71-97（韓国日本近代学研究会、2012）。「中国人留學生が日本語に適應する過程の縦断的分析—留学一年間の相づちの使用状況の変化から—」『言語と言語教育をめぐって』7: 131-160（立命館大学、2014）。

Xi LUO

Graduate student, Graduate school of Intercultural Studies, Kobe University, Japan

Main topics of research: language and communication, Japanese as second language

Main publications: The misuse of Japanese auxiliary word *ni* by Chinese learners (=in Japanese) in *Ilbon Kundaebak Yungu*, 36:71-97 (Korean Association of Modern Japanology, 2012). A longitudinal analysis of the adaption process of Chinese students learning Japanese during their first year in Japan, observing changes in their incorporation of back-channel feedback (=in Japanese) in *On Language and Language Education*, 7: 131-160 (Ristumeikan University, 2014)

雑誌の案内（投稿の方法、連絡先）

『日本語音声コミュニケーション』(*Japanese Speech Communication*) は、日本語音声コミュニケーション教育研究会の会員であれば、どなたでも投稿できます。（但し、会員以外からの投稿も査読委員会の判断で認めることがあります。）

研究会の「入会案内」については、下記の web ページをご参照下さい。

<http://www.speech-data.jp/nihonsei/apply.html>

「投稿要領」と「査読委員会会則」については、下記の web ページをご参照下さい。

<http://www.speech-data.jp/nihonsei/seika.html>

「査読委員会名簿」については、下記の web ページをご参照下さい。

<http://www.speech-data.jp/nihonsei/summary.html>

その他のお問い合わせは、下記までお願い致します。

定延利之（さだのぶとしゆき）（代表幹事）

sadanobu[at]kobe-u.ac.jp（[at] の部分を @ に変えてご送信下さい。）

〒 657-8501 神戸市灘区鶴甲 1-2-1 神戸大学大学院国際文化学研究所

編集後記

ヒトの第一印象というのは人間関係構築の上でとても大切に、外国人の日本語の第一印象は発音で決まると思う。「相づち」は「発音」より「タイミング」であろうが、いずれにしろ音声言語であることに間違いない。「相づち」は超級レベルだという考えもあるし、相づちだけでできていればとても上手に聞こえるとも言える。

言語音声の知覚、聞き取りもとても大切に、きちんとできなければ、未知の語の意味を辞書で引くことができないし、発音もよくなる。聞き取り能力や発音は、実践の繰り返しによって身につける。音声学的な「知識」も役立つだろうことは分かっているが、どれくらい役に立つのだろうか、また、個人差はどれほどだろうか。

新しい研究が次々に出てくる。日本語音声コミュニケーション教育のすそ野はどんどん広がっている。

馬場良二（査読委員長）

日本語音声コミュニケーション 4

Japanese Speech Communication 4

インタラクティブ PDF 版

発行 2016年3月28日 初版1刷

著者 日本語音声コミュニケーション教育研究会

<http://www.speech-data.jp/nihonsei/index.html>

発行・製作 株式会社 ひつじ書房

〒112-0011 東京都文京区千石 2-1-2 大和ビル 2F

Tel.03-5319-4916 Fax.03-5319-4917

郵便振替 00120-8-142852

toiawase@hituzi.co.jp <http://www.hituzi.co.jp/>

ISSN 2187-6177